



当院における漢方診療の実際

総合病院における 漢方外来の役割

洛和会音羽病院 心臓内科 (ICU/CCU室長兼務) 副部長/漢方外来 山崎 武俊 先生



1992年 福井医科大学医学部 卒業 (現、福井大学 医学部)
同 年 同学 第一内科 入局 (循環器専攻)
2004年 洛和会音羽病院 心臓内科
2008年 同院 漢方外来開設

京都市山科区は、関西圏のベッドタウンとして近年急速に発展している。洛和会音羽病院は山科区の地域住民がいつでも安心して診療を受けることができる総合病院として、今も規模の拡充や体制の強化が進められている。同院 心臓内科の山崎武俊先生は、総合病院における漢方外来の必要性を考え、漢方外来を開設されている。そこで、総合病院における漢方外来の役割について、山崎先生にお伺いした。

京都 山科地区の基幹病院として

当院の母体である『洛和会』の歴史は、前理事長の矢野宏先生が1950年に開設された矢野医院に遡ります。1973年に医療法人社団洛和会を設立され、その後1980年に当院が開設されました。洛和会は、急性期医療から介護医療に至るまで質の高いトータルな医療を患者さんにご提供することを理念に、当院を含め約160施設の幅広いネットワークを持っています。

当院は洛和会の中核病院の一つであり、京都でも有数の総合病院です。そして、軽症から重症、急性期から回復期・慢性期までのすべての患者さんが安心して治療を受けられる体制を整えています。

急性期医療が主体の心臓内科

心臓内科では、11名の医師があらゆる循環器疾患にどのような時間帯でも対応できる体制を整えています。たとえば、急性心筋梗塞には速やかな治療が必要ですが、PCI (Percutaneous Coronary Intervention) の術者はいつでも患者さんを受け入れることができます。

このように心臓内科は、狭心症、虚血性心疾患、心不全などの急性期の患者さんで、特に入院による集学的治療を常に考えなければならない重症患者さんの診療が主体と

なっています。一方で、山科地区のご開業の先生方との密接な連携を図っています。高血圧症や脂質異常症などの common disease の診療はご開業の先生方にお預けし、定期的な検査受診や、入院治療が必要となったときに当院にご紹介いただく、そしてある程度落ち着いたらお戻ししています。信頼関係に基づいた病診連携は、患者さんの治療満足度の向上にもつながります。

総合病院に開設した漢方外来

当院の漢方外来は心臓内科の特殊外来として、私が週1回 (第1、3週は2回) 午後に診療を行っています。当院に赴任当初、総合病院における漢方外来の必要性を感じ、心臓内科の上司のご理解をいただいて開設しました。開設後約8年が経過しましたが、私自身の主業務が心臓内科医としてのそれですので、その合間をぬって漢方外来を行っています。

漢方外来には内科系、特に循環器系の患者さんが多く受診されます。内科系の疾患で多くの愁訴を有する患者さん、動悸や胸痛を訴える患者さんや自律神経失調症、更年期障害のように通常の診療だけでは症状のコントロールが難しいような患者さんを診療する機会が多いです。

また、他診療科の先生方からの紹介患者さんも診療しています。

漢方外来における診療の実際

西洋医学的治療のみでは改善しない胸部症状を訴える患者さんが多くいらっしゃいます。たとえば若年で動悸を訴える患者さんの大半は循環器疾患ではありませんので、適当な治療薬がなく、患者さんは苦痛を抱えています。そのような患者さんでストレス負荷がかかっていると思われる場合、半夏厚朴湯が奏効します。

現在、当院で採用されている漢方処方では約70種類ですが、中でも半夏厚朴湯、加味逍遙散、苓桂朮甘湯、四逆散などが頻用処方として挙げられます。心身症やうつ病傾向の患者さん、女性の不定愁訴には加味逍遙散が有効です。苓桂朮甘湯は循環器疾患で動悸やめまいの治療には欠かせません。その他にも、体力が低下して西洋医学的治療だけでは症状が改善せずに困っておられる患者さんには小建中湯が有効です。また、狭心症で通常の治療では効果が不十分な場合に四逆散と桂枝茯苓丸の併用で効果が得られたケースもありますし、虚証で動悸を訴える患者さんには西洋学的な治療よりも漢方治療が奏効するケースが非常に多くあります。

大半はエキス剤での治療ですが、少数例ながら煎じ薬も処方しており、補陽還五湯で下肢の壊疽が治癒した症例も経験しています。

表 洛和会音羽病院 漢方外来における頻用処方

半夏厚朴湯	胸部不定愁訴(動悸、胸痛)
苓桂朮甘湯	胸部不定愁訴(動悸、胸痛)、めまい
四逆散	胸部不定愁訴(動悸、胸痛)
加味逍遙散	心身症・うつ病、更年期障害、自律神経失調症
小建中湯	体力低下

総合病院に漢方外来は必要

患者さんの漢方診療に対するニーズは確実に高まっています。当院では、各診療科が充実した西洋医学的治療を患者さんにご提供していますが、それでも治療にご満足いただけないとき、院内に漢方外来があることは患者さんにとって大きなメリットです。さらに、心臓内科を受診するのと同じように漢方外来に当たり前のように入診できる



ようになることで、さらに患者さんにより良い医療が提供できると思っています。

そして、西洋医学と漢方医学を上手に補完しあう関係性を構築し、一人の患者さんに西洋医学と漢方医学を上手く調和させた必要最小限の薬剤で患者さんの状態が改善すれば、患者さんのQOL・ADLを高めることができますし、それがひいては医療費の抑制にもつながります。

総合病院に漢方を根付かせたい

多くの先生方に漢方診療に積極的に取り組んでいただきたいと思っています。漢方を診療ツールの一つとして、たとえ使用できる処方数は少なくとも、漢方薬を処方できるようになっていただきたいと思います。そのためには漢方薬をある程度使いこなせる医師が身近にいることが必要です。

現在は、漢方の“上級者”と“初級者”は多くいらっしゃいますが、“中級者”が少なく、上級者と初級者をつなぐ糸がありません。熱心に漢方を勉強されながら、実際の処方には尻込みされる先生を見ることがありますが、初級者の見本となる中級者が一緒に考えあるいはお手伝いし、さらに手におえない患者さんは上級者に紹介する、このようなネットワークが必要であると考えます。幸い京都には上級者として著名な先生が多くいらっしゃる恵まれた環境です。私は漢方の“中級者”の目線に立ち初級者の手助けになり、さらに当院で診療されている患者さんのために漢方外来を続けたいと思っています。